

しょうがいのある人もない人もいっしょにコンサートを楽しみましょう

青野 浩美

バリアフリーコンサート

2011.1.23(日) 午後1時30分開演 (1時開場)

小牧市東部市民センター講堂 (定員500人)

入場
無料

※先着順ですが、しょうがいのある人には、優先席がありますので、
ゆっくり来てください。



青野浩美さん(26歳)は、体育教師の父、音楽教師の母の間に生まれました。母親の影響もあって声楽家を目指していました。しかし、大学卒業を間近に控えた2006年の12月、突然全身が動かなくなり、倒れたのです。

原因不明の病気でした。リハビリを続け、車イスで生活できるようになりましたが、退院した直後、今度は昼夜を問わない無呼吸の発作に襲われます。医者からは、気管切開し人工呼吸器をつけないといのちが危ないといわれましたが、気管切開をすると声が出なくなると、半年悩んだ末に手術をしました。

特別なチューブを使うと声が出ました。声が出るなら歌えないか、医師に尋ねると「前例がない」との答え。前例がないなら、自分が前例になればいい、と青野さんは再び声楽家の道を歩きはじめました。「障害者になって初めて分かることがある」、という青野さんの歌とお話をぜひ楽しんでください。

当日は、バリアフリーコンサートです。しょうがいのある人も小さなお子さんも遠慮なく参加してください。みんなでコンサートを楽しみましょう。

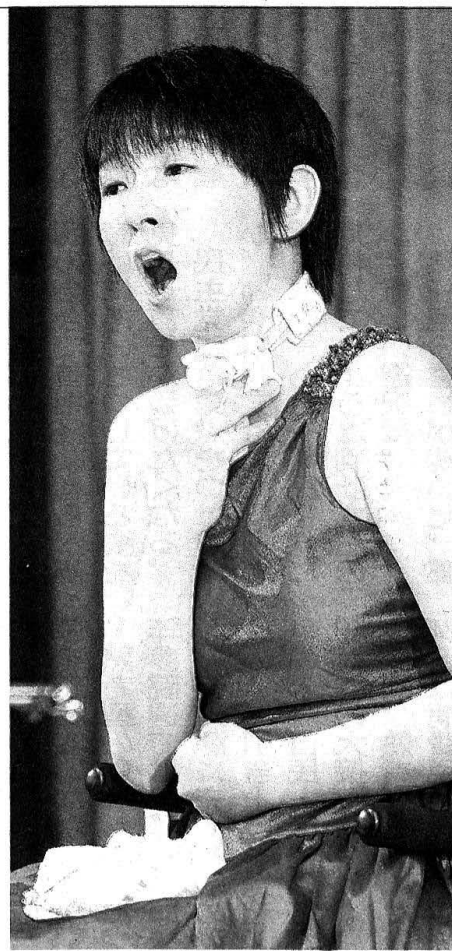


主催 (お問い合わせ先) **ここばりこまき**

後援 小牧市 小牧市教育委員会 (社福) 小牧市社会福祉協議会
(特) こまき市民活動ネットワーク
連絡先 Eメール mail@kokobari-komaki.net
ファックス 020-4622-5783
サイト <http://kokobari-komaki.net>

ひと

気管切開、声を失い、それでも歌う声楽家

あおの ひろみ
青野 浩美 さん(26)

ボーイスopranoを思わせる澄んだ「アベ・マリア」が隅々にまで響いていく。夏の高い空を泳ぐカモメのように、力強く、伸びやかに。

息継ぎのとき、わずかに苦しげになった。そのどには親指ほどの穴が開き、空気を送る管が付いている。関西弁でくったくなく笑った。「気管切開したら、きれいな声に生まれ変わると思ったんやけど」

京都の女子大で声楽を専攻していた3年半前、原因不明の病気にかかり、車いすの生活に。翌夏、今度は無呼吸発作に見舞われた。

気管切開し、人工呼吸器を使わなければ命が危ない。しかし、元の声は失われる。「歩かれへんうえに声まで?」。半年、泣いた。

踏ん切りをつけてくれたのは、命

あつてこそこの歌という友の言葉。手術してのどに器具を付けた。1週間かけて出した声は、懐かしかった。希望がわいた。「歌うなんて聞いたことがない」と言う医者に、「前例がないだけやろ」と言い返した。

息継ぎを増やし、器具に工夫を凝らし、1年かけて自分の声を追い続けた。苦悩から救われるために祈る歌曲を口ずさみ続けた。

音楽講師の母の影響で、歌は生活の一部だった。ただ好きだから歌っているのに、今「勇気をもらった」と言ってくれるひとがいる。26日、横浜で開くコンサートのタイトルは「PRECEDENTE」(イタリヤ語で前例)。自分が前例になる、という強い意志を込めた。

文・宮崎園子 写真・滝沢美穂子

(朝日新聞 2010年6月24日朝刊「ひと」欄)

●● ここばりこまきの活動について ●●

しょうがいのある人が暮らすのに、4つのバリア(じゃまになるカベ)があるといわれています。物理的なバリア、制度のバリア、情報のバリア、そして、こころのバリアです。こころのバリアは、知らないこと、無関心であることから生まれます。そこで、私たちは、しょうがいのある人のことを知ることからはじめて、だれもが大切にされるまちづくりをめざして活動しています。

こころのバリアフリーをテーマにした学習会や講演会を開催したり、小牧に住むしょうがいのある人たちの暮らしやバリアフリーの取り組みを取材し、手作りビデオ(ここばりビデオ)を作製しています。この「ここばりビデオ」はこれまで地区ボランティア大会やジュニア奉仕団の集まりで上映させていただき、たいへん好評を博しております。



ここばりちゃん